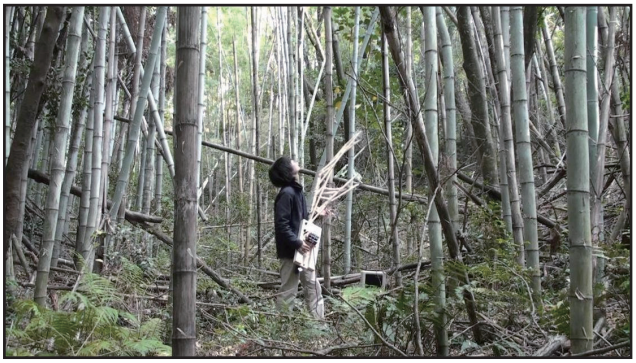
長谷部勇人「小須戸 ART プロジェクト 2021+」レポート

　これまでに僕は訪れた地域と関連する素材を活かしながら自作楽器の制作を行ってきました。樹木の形をしたギターや鹿の角が生えたチェロ、貝殻でキラキラしたコントラバス、蜂の巣が彫られた蜜蝋ボディのテレキャスターなど。



「Tree Guitar」2012

「Deer Calling」2017

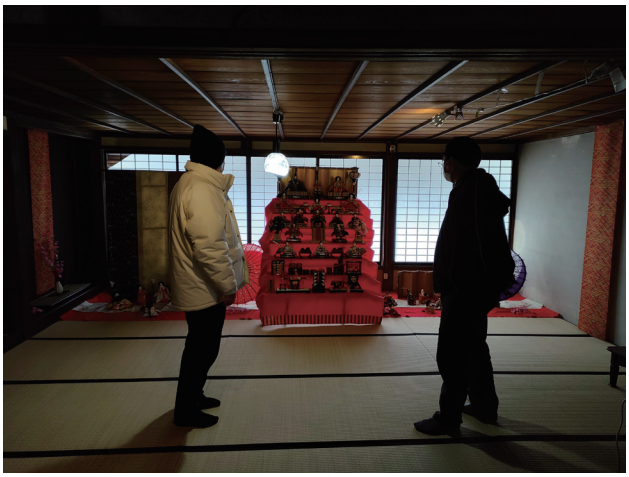
　こうした活動のきっかけは、ギターに欠かせない木材の中には自然保護の観点から伐採や輸出が禁止されているものがあることを知ったことによります。そして希少材と言われるものの代替えとして、例えば里山に生息する樹木とその町の特色をミックスさせたギターを制作するというアイデアを思いつきました。

「ハニカムキャスター」2021

　今回、小須戸を訪れるにあたって小須戸縞の模様に魅力を感じ、信濃川と舟の歴史から良質な木材に精通した方との出会いを期待していました。

小須戸には５泊６日滞在しました。僕にとって初めて訪れたイメージ通りの大雪の中、丁寧に案内や送迎をしていただきリサーチは順調に進みました。

早速はじめに見せていただいた小須戸縞は思ったよりも頑丈な布地で糸同士が密に編まれていました。厚手と薄手の生地を見ながら、ギターを装飾する際に樹脂を染み込ませて固めると、ちゃんと真っすぐに縦の模様がキープできるかという加工方法に悩みました。



もう一つは、身長よりも高い木材が保管された大きな倉庫を紹介していただき、見たことのない希少材の一枚板に驚きました。その中でも僕は柿に惹かれました。日本の樹木は柔らかく楽器作りには不向きとされていますが、昔のゴルフクラブにも使われていた柿ならば硬く、墨絵のような樹木の断面模様も魅力的でした。

色々お話を伺うと、小須戸縞は

最後の職人が勇退されており、それまでに製作された分がわずかにしか残っておらず、舟は鉄道や自動車の普及と分水路の完成で水位が下がり運航できなくなったことを理由にずいぶん昔に衰退しているそうです。そのため、職人とコラボレーションをして「小須戸ギター」を作るというよりも、単に小須戸の材料を持ち帰って自分一人でギターを作るだけの流れになってしまう恐れが生じ困ってしまいました。

しかし、これまでに自作楽器を作ってきた中で、「作る表現」と「演奏する表現」がそれぞれあることを思い出しました。僕としては造形の面から目で観る「作る表現」を重視しがちですが、今回は記憶に残るような「演奏する表現」を重視しようと思いました。それはつまり僕が小須戸の文化をバックグランドにして制作したギターを演奏会という方式で発表を行い、思い出に残る出来事を作ることが本企画のリサーチを通じた作品のあり方だという考えに代わってきたからです。

大雪であったために町屋ラボでひきこもっている時間が多く、コロナ禍が始まった時のように「（作品について）何をしたら良いのか？」などの自問自答にほうけていました。凍るような寒さによって神経も張りつめ、インスピレーションが研ぎ澄まされる環境だったと思います。どおりで新潟のマンガ家が多いという話には納得しました。

さて、完成したギターは、次回開催予定の「小須戸 ART プロジェクト」で発表することを予定しています。演奏会を通じて、町の皆様と一緒に音を体験できることを楽しみにしています。

この度は小須戸に暖かく迎えてくださりありがとうございました。